幼兒の教育

第四十八卷　　第九號

九月號

日本幼稚園協會

嶄新な企畫の新製品

紙芝居

みみちゃんとおおかみ

作者・西山敏夫
繪畫・澤井一三郎

B4判・5色刷・十六枚・用紙二二〇㌔
定價二五〇圓・送料三五圓

兎のみみちゃんの勇氣と機轉によって森の意地わるの狼が改心して、みんなと仲よしになるといふお芝居。

どの子がいゝ子

作者・柴野民三
繪畫・藤澤龍夫

B4判・5色刷・十六枚・用紙二二〇㌔
定價二五〇圓・送料三五圓

熊のおじさんが貯めたおいしい蜂蜜はだれが貰ったでせう。色々な動物のお話が出てくるおもしろいお芝居。

新作指人形（ギニヨール）

グリム童話

赤ズキン

西洋童話シリーズ

赤ズキンさん、お母さん、お婆さん、獵師、狼、の五體一組（脚本、指人形の作り方と演り方パンフレット付）文展工藝の人形作家・山本壽先生指導製作の良心的工藝指人形。

美麗木箱入・定價五五〇圓・送料五〇圓

好評 童話と繪本

おうまのゆめ

作・小川未明
裝幀挿畫・立野玲子

B6判・一二〇頁・美裝・定價八〇圓・送料二〇圓

つきよのうみ

作・奈街三郎
裝幀挿畫・山崎達夫

B6判・一二〇頁・美裝・定價八〇圓・送料二〇圓

いづれも幼兒の生活をそのまゝあつかった小川・奈街兩先生の情味あふゝ大作です。お母樣方がすゝんでお子樣方にあたえられる童話、そしてキットお子樣方によろこばれる童話です。

こがねのりんご

企畫文・南江治郎　繪・澤井一三郎

B5判・6色刷・二〇頁・定價四五圓・送料六圓

二十の扉と話の泉を詩と繪畫によってお子樣に理解して頂かうとつくった推理繪本。

ごしきのたま

文・佐藤義美　繪・中村幸子

B5判・6色刷・二〇頁・定價四〇圓・送料六圓

幼稚園お話集でおなじみの「五色の玉」の話を繪本にした外國の繪本にも負けない豪華繪本です。

發行所　東京都千代田區神田神保町二丁目四番地　株式會社フレーベル館　振替口座東京一九六四〇番

第四十八卷　幼兒の教育　第九號

目次

和の教育……倉橋惣三（2）
保育要領に於る「お話」の解釋……内山憲尚（7）
フレーベル著「リナは如何にして讀み書きを學ばか」（一）……荘司雅子（12）
第三回全國保育大會の記……全國保育連合會（21）
阪元彦太郎君を送る……倉橋惣三（23）
子供讃歌……倉橋惣三（24）
全國保連制定「保育歌」（歌詞並曲譜）……（34）
講話・幼兒の心理的發達（五）……山下俊郎（29）

記錄

第三回全國保育大會
全國保育連合會昭和二十四年度總會
保育歌の新制定
日本幼稚園協會保育講習會

官廳公示連絡事項

資格のない先生と新免許狀
教育用品の物品稅免除

會から……（42）

和の教育

倉橋惣三

一

全米水上選手權大會で、田中選手が、問者に答えて言つている。先輩の指導に從つてベストを盡したと。わたしはロサンゼルスからの放送を、全緊張を以て聽きながら、非常に愉快に感じたのである。日本選手の優勝が愉快なのであることはいうまでもないが、千五百で、古橋、橋爪兩選手の一着二着と共に、第三着を占めた此の年少選手が、その喜びや得意を語らずに、淡々として、たゞベストを盡したという心境を告げていることは、聽者になんという明るい愉快を感じさせたことであろう。多くの競技の場合、負けたけれどもベストを盡したから遺憾はないとは、よくいうことである。それも負けてくやしいというよりは、聽いて嬉しい心境に相違ないが、勝利においてたゞベストを盡したことのみを思う心境は愉快というよりも貴いといわなければなるまい。放送をいつしよに聽いていた一人が、アメリカ選手はくやしくないでしようかと自問しつゝ、彼等もベストを盡したことのみを思つているでしようよと自答したが、これ亦明るく愉快な感想だし、確にそうであつたに相違ない。

わたしは、表題の如く「和の教育」について書こうとしている時に、丁度この放送を聽いたので、ここから問題の端を引きだす氣になつた。選手權大會は、つまるところ勝負の競いである。自分が勝つには相手を負かさなければならぬ。相手を負かすには自分が勝たなければならぬ。言葉の上では、なんたるけがわしくもきびしいことであろう。しかも、それが和のうちで行われ、和を害わずして行われ、和を失わずして行われ、それのみが却つて和を生みさえするのが、眞の和の活動だというのである。それも、言葉の上だけの修辭でなしに、生活の事實としてゞある。一體どう考え、どう解けることだろうか。話は先ずロサンゼルスのプールの澄んだ水の上から始まるという譯にした。

二

勝とうと思う心と負かそうと思う心とは、必ずしも同じで

ない。必ずしもとことわるのは、二つの心が同じである場合が實は少なくないからである。しかし、本來同じでなければならぬものでは決してない。時としては、勝とうということよりも、負かそうということが主になり先きになることも稀でなかつたりさえする。そういう場合は、勝利感は相手を負かした時の結果であり、負かすことなしに勝ちはないことゝもなるのである。二つの心が同じである以上である。が、少なくも求める心としては、勝ちたいこと負かしたいことは、區別して考えられるものである。

勝ちたい心と、負かしたい心とを區別するとして、勝ちたい心は自然の心である。生物的にみれば自己保存の本能に基くものともいえよう。のみならず、たゞそれだけならば、惡でも善でもない、醜でも美でもない。勝つことは望ましいことであり、樂しいことである。若し自他兩方が互に勝ちあえるものならば、これに越したことはあるまい。兩方が同時に勝つということは、あり得ないことであろうが、同時的でなく、繼時的にはあり得る。勝つたり負けたりというのがそれであり、それが樂しいのは常のことである。遊戯娯樂における勝負がそれである。そして、その場合、相手を負かしたことが樂しい譯でもなく、勝ちをこそ求めるが、負かすことを目的としているのでないともいえる。負かすことを目的とするのは、うらんでいる時であり、復仇の場合などはその著しいものであつて、勝つことそのものを樂しもうとする單純のものとは明かに異つている。若し、復仇的のものでなく、無暗に負かしたい心があるとしたら、それは殘酷であり、屢々變態性格にあらわれたりする非尋常の心理である。こういう風に考えても、勝ちたい心と負かしたい心とが決して常に同一でないことがいえる。

もう一つ負かされたくないという心もあるが、これは勝ちたい心の消極的なもので、こまかにいえば、負けの豫想を含んでの勝ちたい心に過ぎない。が、負かされたくないというところに、負けの心理が表に浮んでいるところから、その裏として、負かしたい心に移り易く、通じ易いところがある。その意味では、負かしたい心と紙一重の差であつたりもする。或は、勝ちたいために負けたくないといつた譯のところもあつて、兎に角、複雜であるし、弱氣である。消極的な勝ちたさという所以である。

三

こういろ〳〵考えて來ると、たゞ勝ちたいという心の單純さ、——負けたくないという心に比して單純なことが感じられて來り、又、負かすことを求める心に比しても、淡ぱくなものであることが見出されて來る。この單純な要求と淡ぱくな滿足とに終始するのがスポーツである。又、その單純さと淡ぱくさ以外にはづれてゆかないのがフェアプレーである。

スポーツがフェアプレーに行われるのは、それがスポーツである限り當然のことであり必然のことである。或は、フェアプレーにおいてのみスポーツが成立するといつていゝので

ある。ところが、スポーツでない實際の生活、現實の活動においては、生活の實際的動因が深くはたらき、活動の現實的興奮が強くうごく。そこに、たゞの勝ちたいという心理が、單純と淡ぱくを維持保置していき難くなる。勝ちたいという本來は無邪氣なるべき心が、和をみだすことになつて來るのである。この意味に從つて端的にいえば、勝ちたい心を無視することなしに和を忘れないようにすること、そこに和の教育の主要點があるといえる。

こういうことをいうのは、和は、みんなが勝ちたい心を失つた時にのみ在るという風に考えることの、餘りに簡單な考え方に對してゞある。若し、みんなが勝ちたい心を失つた時にのみ和があるものならば、和は無氣力であり、無生命でもある。殊に、和の教育は、子どもを無氣力化無生命化することでは、決してない。勝ちたい心の健全な育成を基として、そこに築き上げられる和の教育でなければならない。そこに和の教育のむづかしさがあるともいえるが、和の教育の眞の貴重さがあるともいえる。

四

そこで、健全な勝ちたい心とは如何なることかという研究が必要になる。先づ三つの點があるようである。

一、その第一は、自分の眞實を一ぱいに發揮したいことである。眞實を實力といゝかえてもいゝが、その實力を、何か他の手段に用いるのでなくて、實力の眞實な表出、すなわち純一な眞劍活動である。このためには、自分としてありたけの緊張感を味えるのでなければならぬ。又、相手としてはありたけの緊張感が味えるだけの相手でなければならぬ。そのためには、互格同等が何よりだが、自分以上の强さに對する抵抗感のあるのはいゝ。假りにも、らくに勝てる、否、らくに負すことのできる弱者劣者であつてはならない。と同時に、或は最も必要なことゝして、爭うことの理由が、正理に基くものであつて、單なる利己であつてはならない。スポーツにあつては、この正理が、ルールにおいてあらわれ、純ルールに從つて勝つのである。實際生活にあつては、ルールという客觀的なものではなくて、正理を貫徹する必要に迫られるのであるが、その貫徹も正理そのことのためであつて貫徹そのものではない。だから、正理を貫徹し得たことに勝ちの喜びがあるのであつて、相手を負かすことに誇りを味うのではない。すなわち、そうした意味において純に勝てばそれでいゝということになり、勝ちを誇るといつた、いつまでも相手をみつめてのことではなくなる。あつさりと淡ぱくに、複雜性のない單純になり得るのである。眞にベストをつくし得るのも、こうした場合のことであろう。

二、以上のような譯であるから、勝ちを喜ぶのもその事について、又、その時においてのことであるべきで、身を優位におこうというようのことではない。すなわち、勝つだけであつて、優者になろうというのではない。況んや、相手を劣者として見下すのではない。負かした方を尊敬するというの

も言い過ぎた言葉になるが、勝つたからとて永久の尊敬を要求しない。永久の尊敬を要求するのは卽ち特權を獲得することになる。特權などゝいうものは、勝者の位置を固定することであつて、特權的階級もそこから生れてくる。自己の特權は、利己的な滿足を與えるものではあるが、相手を非特權者として固定するという、最も不健全な感情を樂しませるようなことになる。昔からの人種戰爭などは多くそれであつた。そこに、戰爭の醜惡があるのである。戰爭の醜惡が、負けたものよりも勝つたものにおいて屢々起り易かつたのも、封建戰國の歷史や原始人の戰爭の示したところである。

三、そういう譯とすれば、勝ちの喜びは祝うべしとしても、相手に對しては、その勝ちを忘れる明朗さが、健全なる勝ちの特徵ともなるのである。負けた方のくやしさも甚だ未練であり、卑怯であり、暗陰であるが、勝つた方が善忘的であることは、一切を健康明朗にするものである。競技においてはいつもそうであり、勝ちの喜びと共に相手を負かしたことを、さらりと忘れるところに、勝負の後の明朗な握手も親交もできるのである。勿論、このことは、負けた方が、善忘でないとき、事は必ずしも簡單に進行しない、きれいに負けて呉れなければ、きれいにも勝てない理屈は免れないが、喧嘩の後で却つて親しくなるということも、健全者の間には珍らしくないことである。

五

常に淡ばくな心持ちでいられ難く、事が複雜であり勝ちなおとなの世界において、完全の和の世界を求めることは、必ずしも容易のことゝはいゝにくいであろう。それが屢々、倫理上の理想とされたりする所以である。又その理想の和の世界をつくり上げるに種々の困難を解決してゆかなければならないのである。しかし、われらの見るところによれば、子どもの世界は、彼等の心理が健全である限り、和の世界である。というのは、彼等が、無抵抗主義者であるとか、和の聖者であるとかいうのではない。よく喧嘩もする。事々に勝負を競う。或る意味において利己的であり、事々に原始人に似たところもある。それに、たゞ平穩に、たゞ無爲に、おとなしくしていよというのは無理である。だからといつて、和の教育、新教育において最も重要貴重な教育である和の教育が不必要だということは決してないことであるが、子どもの或る自然を無視したり、おさえつけた、和の生活の形式に從わせることは、一つの不自然を免れない。そこで、和の教育は子どもの場合、その自然を健全に育てること、すなわち、健全な勝ちの心を養うことにあるというべきであろう。一、眞實の緊張感を以て互にぶつかることを許すべきであろう。二、優位感をもたせぬこと、三、勝ちの善忘を辯づけること、その他にもあろうが少くも、これらの教育が常に心がけうるべきであろう。

そのために、スポーツは最もいゝ健全な和の教育の機會である。たゞ、スポーツの場合が必ず眞に實生活の場合にその

ま〻行われ得ると限らない。その實生活の場合こそ、教育的に指導されなくてはなるまい。教師のこまやかな注意が必要なのである。

しかも、その指導者たるわれら自身の和の心が、果して眞に健康であろうか。和を美としないものはない。和の理想的實現を希わないものはない。だが、たゞそれだけで、子どもらを、われらと同樣の理想主義的、美的平和生活者にしようとしても、その指導が、眞に子どもの自然を和に育て得られるものとは限るまい。和とは何んだということは分り易いことであるが、和の教育は、その論だけで終るものではない。和の教育は、子どもの自然を和に育て上げることであることを忘れてはならない。

という意味のうちには、幼兒において、生活のおもてに、必ずしも理想主義的な無我と無抵抗の形が求められものでないという考えを含む。そうした形式的な和の小成を强いることは、却つて眞の和の教育の大成を妨げるおそれがあるとさえ言おうとしている。人間性の理想化は、そんな皮相的な編成で出來るものでないからである。我意を通そうともしよう。それがぶつかりあえば喧嘩もしよう。殊に、我の滿足のためには勝ちを爭うでもあろう。そのためには、かんなのかけられていない素材の粗野もあるであろう。幾玉川にさらしあけられない布地のあらさもあるであろう。それに滑かさとつやを出すのは後のことである。しかも、その滑かさに木目の通りを削りつぶしてはならず、そのつやの生地の張りをもみ拔いて仕舞つてもならず、そこにすぐれた工人の苦心がいるのである。況んや內から盛り上る生命の力をもとゝし、その强さをいよ〳〵進めることを本旨として、眞の和のとゝのいをおのづからみださないように育てる教育において外面的達成では、ことがすまないのである。骨ぬき軟茶ではたよりがないし、骨は拔けるものではないから、酢でなま殺しの、氣味の惡いにやけになつてはなお困る。子どもは野蠻人ではないが、その生活はまだプリミチーブである。プリミチーブには無邪氣な粗野はまだ免れない。美化に多少缺けるところがあつても、多少大目に見なくてはならぬであろう。

（和の教育論は之れだけで完しとしない。次號につゞけるが、この大切な問題について、先づ考えられたい）

保育要領に於ける「お話」の解釋

內山憲尙

序

昭和二十三年三月「保育要領」が出されて今まで「談話」と云う名稱で取り扱われていたものが、「お話」と變り、今まで談話の內に含有されていた、人形芝居は別個にとり出されて獨立した。

そこで、今度の保育內容に於ける「お話」と、前の保育項目の談話とはどこがちがつているのだろうか、又何故談話がお話と改稱されたのであるか、更に「お話」の意義やその進む可き方向について疑義を持たれている方が多い樣である。

今まで何かの機會にこれ等の問題について書いて見たいと考えていたが、貧乏暇なしの上に生れつきの筆無精のことと、て、氣になり乍らそのまゝに打ちすぎてしまつた。今回編集部からのお言葉もあつて、第三回保育大會も一段落ついたので拙ない筆を持たせて貰うことにした。

一、幼稚園の目標

幼稚園も大學、高等學校、中學校、小學校の仲間入りをして、學校教育法の中に加えられ、日本の教育の一環として、その初期の教育に當ることになつたのである。

幼稚園教育の目的は「適當なる環境を與えてその心身の發達を助長する」ことにあるので、この目的を達成するためには次の各號に掲げる目標に向つて努力をしなければならない。（第七十八條）

一、健康、安全で幸福な生活のために必要な日常の習慣を養い、身體諸機能の調和的發達を圖ること。

二、園內において、集團生活を經驗させ、喜んでこれに參加する態度と協同、自主及び自律の精神の芽生えを養うこと。

三、身邊の社會生活及び事象に對する正しい理解と態度の芽生えを養うこと。

四、言語の使い方を正しく導き、童話、繪本等に對する興味を養うこと、

五、音樂、遊戲、繪畫その他の方法により創作的表現に對

する興味を養うこと

以上の五項の内第四、第五はお話に直接に關係のある條項である。卽ち

言語の使い方……言葉の保育——話し合い
童話に對する興味……情操教育——聽き方
創作的表現……發表指導——話し方

の三つの分野に考えることが出來る。

二、お話の意義

お話は從來狹い範圍に考えられて、童話そのものゝ樣に考えられていた、「お話をしましよう」と云えば童話を話すことになるのであるが、保育內容に於けるお話は童話だけを意味するものではない。

幼兒の話す部面のすべて

幼兒と教諭の話し合う部面のすべて

幼兒に聽かせる部面のすべて

が「お話」である。

換言すれば、幼兒と教諭の間に言葉を以て表現せられるものゝ內、教育目的達成に適する具案的、組織的な保育の一つであると云うことが出來る。

言語は人類のみが持つ獨特のものであつて、野蕃人より文明人に到る程發達し分化して來るものである。

そして、言葉は生活面の大半を占めるものであつて一日の生活も「お早よう」に始まり「おやすみなさい」に終る。言葉なくして生活することは出來ない。

如何に上手に言葉を使用し、如何に相手に氣持ちよさを保たしめ、

如何に聞いてよろこぶか

と云うことが「お話」の意義でなければならない。

三、お話と談話

お話は古くから保育に採用されていて、フレーベルもその必要性をといている。我國に幼稚園が始められたのは明治九年十一月十四日で、當時の東京女子師範學校（今の女子高等師範學校）內に置かれた。

開園當時より十四年頃までは、附屬幼稚園に於て二十五の保育項目が用いられた、その第十七に說話があげられている

說話の材料としては、豐田芙雄保母の當時の手記である「恩物大意」の中に

幼稚園の子女に爲す小話の事

從來在りし話と現在の話と又師、是迄實地經驗せし所の解、又其知己の者より見聞せし事について是を爲す。

第一小話　動物を題す（寓話ならん）
第二回　變化等の事を取交爲す（お伽話ならん）
第三回　人間と他の動物を比較す（比喩談）
第四回　神佛宗旨に關する事（宗教的な話）
第五回　往事より戲の話（口碑）
第六回　學校に關すること

第七回　歴史の話

等があげてある。

説話及小話としたのは、獨逸語のメルヘンを譯したものと考えられる、しかし、その内容は、生活談や歴史的な話にまで及んで可成り廣い範圍にわたつている。

明治十四年六月、保育科目の改正が行われて、

一會集　會集ハ毎日先ツ諸組ノ幼兒ヲ遊嬉室ニ集メ唱歌ヲ復習セシメ且時々行儀等ニ就テ訓誨ヲ加フルモノトス。

二修身ノ話　修身ノ話ハ和漢ノ聖賢ノ教ニ基テ近易ノ談話ヲナシ孝悌忠信ノコトヲ知ラシメ務メテ善良ノ性質習慣ヲ養ハンコトヲ要ス。

三庶物ノ話　庶物ノ話ハ專ラ日用普通ノ家具、什器、鳥、獸、草、木等幼兒ノ知リ易キ物或ハ其標本、繪圖ヲ示シテ之ヲ問答シ以テ觀察注意ノ良習ヲ養ヒ、兼ネテ言語ヲ習ハシメンコトヲ要ス

とある。（倉橋、新庄著日本幼稚園史に據る）

明治三十二年六月二十八日文部省令で始めて保育課程として遊嬉、唱歌、談話、手技の四項目が定められて、始めて談話なる文字が出て來たのである。

大正十五年四月二十一日（四月二十一日はフレーベルの誕生日に當る）に獨立の法令として幼稚園令が勅令第七十四號を以て發布され、四月二十二日省令第十七號で幼稚園令施行規則が出されて、

第二條　幼稚園ノ保育項目ハ遊戯、唱歌、觀察、談話、手技等トス、

と明示せられたのである。爾來談話なる言葉によつて、保育五項目の一つとして保育上にその地位を占めて來たのであつた。

昭和二十二年二月十日から文部省に幼兒教育調査委員會が設けられ、倉橋惣三、副島ハマ、内藤壽七郎、山下俊郎、鎌田しん、三木安正、及川ふみ、内山憲尚、功力よし子、吉見靜江、多田鐵雄、坂元彦太郎、中谷千藏の諸氏が委員となり、民間教育部のフエファーナン女史の出席を得て毎週水曜日に會合をして、保育要領の案を作製した。

フエファーナン女史のサゼスチョンによつて、從來の保育項目五項を十二の保育内容と改めた。

1　見學
2　リズム――從來の遊戯
3　休息
4　自由遊び
5　音樂――從來の唱歌
6　お話――從來の談話
7　繪畫／
8　製作＼從來の手技
9　自然觀察――從來の觀察
10　ごつこ遊び、劇遊び、人形芝居
11　健康保育

ストーリーをどう譯すかと云うことが委員間で問題になつた。始めは從來通り談話として置くと云うことであつたが、（イ）みんな名稱が變つたからこの際改めては、（ロ）談話と云うと、大人の話し合いの會に用いられる文字であること、又談話と云う題名の雜誌など出されていること、（ハ）談話と云う文字から固い感じを受ける、等の理由の下に「お話」と譯すことになつたのである。

故に大體談話とお話とは言葉が代つただけで內容に於てはちがいがないと考えてよい。但し、從來談話の中に包含されていた、人形芝居が、別に取り出されて、一つの項目を作つたと云うこと、即ちお話と別個に人形芝居が取り扱われる點だけは以前とちがつている。

四、お話の分類

お話には三つの部面があると云うことを述べたが、この三つのものが更にどう分けられるかと云へば、大體次の樣なものとなる。

- 一、話し方
  - 1、自由發表
    - 生活發表
    - 思想發表
  - 2、童話
    - 既成童話
    - 創作童話

- お話
  - 一、話し合い
    - 1、自由談話
      - 庶物談
      - 時事談
      - 相談（討論）
    - 2、言語遊戲
      - 謎
      - しり取り
      - 名詞合せ
      - 頭字合せ
  - 二、聽き方
    - 1、談話
      - 行事談
      - 生活談
    - 2、童話
      - 童話
      - 朗讀
      - 繪話
      - 立體的のもの

話し方を自由發表と童話とに分ける。自由發表は幼兒の自由な發表であつて、日常の生活を發表する生活發表、及び自分の考えていることや隨時幼兒が思いついたことを表現する思想發表とがある。

童話は從來あつた話を、そのまゝ話す既成童話と自由に幼兒が考えて（創作して）發表する創作童話とに分けられる。

話し合いは幼兒と教諭が自由な形式で行う平素の會話であつて、自由談話はいろいろなものについて話し合う庶物談、時々の出來事について話す時事談、保育の在り方や進み方を相談して決める相談等に分けられる。

聽き方は教諭が話して幼兒が聞くもので、その中心をな

すものは童話である。作られた童話の朗讀、繪を補助として話される繪話及び形式に於て繪話の一種である紙芝居、それから立體的な折紙を利用して話す折紙童話や、玩具などを利用して話す玩具童話などがこれの立體的面であると云うことが出來る。

五、新保育とお話

お話は以上の様な廣範圍に於て新しい生命を持つものであつて、童話と紙芝居のみをもつて「お話」と考えていた從來の認識を根底から更めて貰はねばならない。

一日の保育中に於て、幼兒との交渉面で言葉を以てする部面はすべてが「お話」であると考えてもよい程で、一寸した會話の中にも言葉の教育が完全になされるものである。

保育カリキュラムの中に盛り込まれるものは限度があつて、童話、紙芝居、朗讀、生活發表、行事談、謎等にすぎないだろうが、これ以外に、朝の挨拶から食後の雜談にいたるまで、すべてが「お話」であると考えなければならない。

從來の教育の如く形式的な、時間にしばられたもののみを教育であると考える考え方は捨てゝ仕舞つて、幼兒と面している時間のすべてが保育であると考えなければならない。そして、幼兒と面している際にその全部面を受持つものは「言葉」であることは勿論である。

言葉こそは保育の全面であり、お話こそは保育の重要部面を占めるものである。

讀　書

『あなた　よく本をお讀みになるのねえ』
『いゝえ、たいして……』
『お忙しいのに、よくねえ』
『忙しいから、靜かに本を讀む時間をつくらなくては、いられませんわ』
……
『そんなに本をお讀みになつて、さぞ賢くおなりでしようね』
『いゝえ、そんなこと』
『でも、それでなけりやあ　つまらないじやありませんか』
『好きなものたべたつて、見る〳〵ふとる譯でもありませんわ』
……
『よくまあ、次から次へ、本が手に入りますのね』
『いゝえ、たいして』
『それで、どうして、いつも讀書を樂しんでいらつしやれるの』
『すきな本を、讀みかえしていますわ』
……
『それにしても、選擇に苦心なさるでしよう』
『別に、そんなに、』
『あなたの選擇の標準は』
『更めて選擇しなくてもいゝことを標準にしますのよ』

フレーベル著

『リナは如何にして讀み書きを學ぶか』(一)

——樂しく忙しく動く子供達のための美しい物語——

莊司雅子譯

まえがき

フレーベルの教育思想の理解の困難なことは既に人々のよく知るところである。ひとり日本に限らず、彼の本國獨逸においてさえそうだつた。彼れの主著「人間教育」の原稿を手にした有名な教育學者ハルニッシュが、その難解な表現はとても讀むに耐えるものではないとして、鍍くちやにもみ破つたということは有名な話である。ハルニッシュのような大教育學者にして尙斯くの如くであつたのだから、況してや一般の人々に取つてフレーベルを理解することの容易でないことは想像するに難くない。そこで獨逸においても當時各方面から、彼の深遠な思想を平易な形式で叙述して欲しいという要望が起つて來た。この要望に答えてフレーベル自ら執筆したのが私のここに譯し出して見た「リナは如何にして讀み書きを學ぶか」の一篇である。これは彼がその思想も圓熟した晩年に發刊した幼兒教育の專門雜誌である「週刊誌」に連載したものである。人々はこれに依つてフレーベルの教育思想は普通考えられているように、決して雲煙の彼方を彷徨う把握不能の抽象的なものではなくて、實にその日その日の幼兒の實際生活を中心とした、いとも具體的な生き生きとしたものであるということを知るであろう。而も同時に人はあの一見難解な教育原理を、幼兒の活動や體驗のうちに應用する具體的の方法を手に取るように理解することが出來るであろう。

尙お「リナは如何にして讀み書きを學ぶか」の一篇の中に、人々は子供に取つてあくまでも自然で眞實な生活が、子供

の教育のアルファーでもあればまたオメガでもあるという生活教育の原理を學び知ることが出來るであろう。「生活が陶冶する」と嘗てペスタロッチーが道破した生活教育の原理は、實はいとも歴史的な古典的なもので、新教育の豫言者ルソーもペスタロッチーもフレーベルもそのためにこそ終生戰つた。今日新教育の名もて宣傳されている生活教育はいうまでもなく、コア・カリキュラムも、コンミュニティースクールも、ガイダンスもその由つて來るところはこうした豫言者達の教えの應用にも過ぎない。現にフレーベルが「リナは如何にして讀み書きを學ぶか」の中に述べている次の引用を讀む讀者は恐らくこの間の消息に就いて思い半ばに過ぎるであろう、「生活が子供達に教育的に與えたものは、更に生活のうちに移り行き、そして再び完全な新鮮な健康な生活のうちに、またそういう生活のために花咲き實を結ぶものである」

一千九百四十九年八月六日　原爆四週年を迎えて

廣島文理科大學教育學研究室　莊　司　雅　子

リナは喜んで仕事をしたがる六歳になる女の子であつた。彼女は簡單な玩具を使つて色んな遊びが出來た。例えば骰子や丸太棒のようなものから澤山のきれいなものを組立てたり、色や形の違つた板片や棒片を使つて澤山の美しいものを並べたりする。

その他色んな仕方で細長い色紙や棒片などをきれいに組合せたり、美しいものを作り出したりすることが出來た。ほんとうにリナは一寸した玩具から自分の好きなものは何でも澤山に作り出すことが出來た。

リナはまた上手にボールをキャッチすることも出來た。そしてこのことに依つて物事の處理が機敏になり、物の扱ひ方が會得され、だからリナはすぐに物を落したり、また或る處から無器用に物を押し退けたりするようなことがないように、自分の手足を上手に動かすことが出來た。

それば かりでなくて、リナは色々の美しい可愛い歌を知つており、それを歌うことが出來た。そしてそれを澤山の遊戯につけて歌いながら遊ぶのである。それがまたますます遊戯を樂しくする。というのはその可愛いゝ歌は同時にリナのしたことに就いて色々と教えてくれるから。だからリナはお父さんやお母さんに絶えず「それは何ですか」とか「何故ですか」とか言つて、一々尋ねないでもすむのである。

このようにリナは何時も朗らかで活潑であつた。少しも退屈を感じたり不機嫌であつたりすることがなかつたから。それどころか何時も滿足して不平をこぼすことなく、朗らかで快活であつたから、リナは兩親の特別の喜びであつた。また自分から進んで兩親の喜びとなり、愉快に規則正しい順序立

つた仕事をしたり、樂しく遊んだりしたい子供達にとつてはお手本でもあつた。

こんな良い性質を有つていたから、リナは大抵兩親と一緒に居り、その傍で靜かに遊ぶことを許されていた。或る日のこと、リナは父親が嬉しそうに一通の手紙を受け取つて、間もなく同じように嬉しそうな返事を出したのを見た。リナは部屋に居る母の處へ行つてねだつた。

「ねえお母さん！　小さい紙を頂戴ねえ、ねえ！お母さん！リナもお父さんのようにお手紙を書くんだから」

「まあリナのような小さな子が、リナちやん！」と母が言つた、「リナはお父さんのようにはまだ書けませんよ。それに紙に書くなんてなおさらよ！　リナのこの小さなお指はまだまだ弱くつて、上手にペンや鉛筆を持つたり動かしたり出來ませんよ。でもね、お母さんは小さな棒片でリナがどんなにして字や言葉を並べられるか、まあとにかくリナが書きたいと思うことが書けるように教えて上げましようね」優しい母は小さいリナにさう言つた。けれどリナは續けてねだつた。

「でもねえお母さん、他の人はこんなに私が並べたもの讀めるかしら？」

「さあ、早速やつて見ましよう。お母さんはリナと同じような棒片を持つていますよ。それにこの滑らかな黑い机は何とあつらえ向でしよう。この上に眞白な細い木の棒片を並べると、きつと美しく見えますよ。ところでリナ知つてるでしよう？」と親切な母は續けた、「お父さんがお手紙をお出しになる時は、何時もお父さんのお名前をお手紙の裏にお書きになるでしよう。そして表にはお手紙を上げる方のお名前をお書きになりますね。だからね、リナも先づ第一に自分の名前を書かなくつちやなりませんね。それには先づ棒片で並べることから勉强しましよう」

「ええ、ええ、お母さん、して見たいわ、させて頂戴」

「でわね、リナちやん、あなたのお名前は何とおつしやいますか？」

「まあ！　お母さん知つていて。はい私はリナと申します」

「ほんとにお母さんはあなたの名前をよく知つていますよ」と母は言つた、「だけどね、私達が若し名前を書く時には、——今はただ棒片で並べるだけですけれど——先づ初め、それを正しく正確に聽いて、そしてその名前の中で氣のついた音や響きの違いによく注意しなければなりません。それから此等の音や響きの符號や文字を覺えることを學ばなければなりません。だからリナの名前の綴りの中にある音や響きを、聽いたとおりに正しく文字に並べなければなりません」

こんな風に思慮深く教訓に富む優しい母は注意深い子供に話して聞かせた。そして更に續けた。「さあ、リナちやん！リナのお名前をもう一度正しく、ゆつくり、そしてはつきり言つてごらん！　そしてリナがその中に見つけた違つた音をよーく注意してごらん。お母さんも聞いたものを言うから」

學びたい心で一杯になつていたリナはゆつくりそしてはつきり彼女の名前「L—i—n—a」と言つた。

「さあお母さんはiとaの音が聞えましたよ」と母は言つた「もう一度一緒にリナのお名前を言つて見ましょう」母は續けた。「そしてお母さんが聞いたのと同じ音がリナにも聞えるかどうか氣をつけてごらん」

母と子は今度は一緒にL—i—n—a・L—i—n—a・i—aと言つた。

「あら、お母さん、お母さんと同じように聞えるわ。Linaの中にはi—aの音があるわ」

「そう。私達はLinaの中にiとaの開いた音を聞きましたね」

「さあリナ！　お母さんはこの棒片を垂直にリナの前に置きますよ」——母は續けた。「リナが今それをこの形のまま見てすぐiと言つてごらん」母はもう一度棒片をリナの前に垂直に——置いた。そしてリナは同時にiと發音した。

「ごらん！」と優しい母は續けて子供に言つた。

「この棒片がこんなに置かれた時には何時でもiという音の符號ですよ」

母はもう一度棒片を娘の前に置き、同時に發音を數回繰り返えさせた。

「けれども、リナのお名前の中にはもう一つの開いた音が聞えませんでしたかね」と母は尋ねつゝ續けた。

「はいaという音」と子供は答えた。

「ごらん！」と母は言つた。「今お母さんは二本の棒片を上の方でお互に觸れ合うように置き、そしてもう一本の小さいので水平の方向にこの二本を結びつけますよ。では、この符號を見たらすぐリナのお名前の中のもう一つの音を聞かせて頂戴」

母は符號を取り去り、再び置き、子供は自分の前に符號が置かれる度毎にaと發音する。

このようにして母と子供との間には間もなく何か樂しそうな生き生きとした朗らかな生活がもたれるようになつた。それというのも母が垂直に棒片を置けば、子供は直ちにそれが示す符號のiをはつきり言つたり、次には聯絡した三本の棒片をAの形に置おけば、子供は直ちにはつきりaの音を發音したりするからである。今度は交代した。子供が棒片を置き、母はそれらの音を言つた。時には母が先にそれらの音を言うと、子供はその各々の音に正しい符號卽ち文字を並べなければならない。

さて二つの符號卽ち文字IとAとが母と子供との前に置かれた。母は子供に尋ねた「ところでリナのお名前はただiとaとだけですか」

「いいえ私の名前はLinaと呼びます」

「そうでしたね。するとリナのお名前にはまだ符號が足りませんね。では早速そのお名前をもう一度ゆつくり正しくお母さんに言つて頂戴。そしてリナのお口、特に舌の動きに注意してごらん、それから何かに氣がつかないかどうか、よーく耳をすましてごらん」こう母が言つたので、母が言つた通りに「L—i—n—a」と言つた。

「今度はお母さんも同じようにL—i—n—aと言つて見るから、リナはよく氣をつけててごらん」と母は言つた。
「ああ、ああ」子供は直ぐに氣が附いた。「舌の動きでiとaとの外にまだ音があつてよ」
「そう、そう。ではもう一度よーく注意して見ましょう。お母さんはiの前にリナが聞えたその音の符號を置きますよ。„Li" さあこれは „Li" と呼ぶんですよ。次にはaの前にリナが聞えた音の符號を置きますよ。„NA" そしてこれは „Na" と呼びましょう。
そして兩方を一緒に並べて „LINA„ さあ „Lina" と呼びましょう。このようにして母は勉强好きで注意深い子供を敎えた。聰明な子供は Lina—Lina と讀んで見たり、言つて見たりした。更には符號を除いて見たり新しく置いて見たりした。
「ああ嬉しい、お母さん、もう私は自分の名前を並べて讀むことが出來ましたわ。お母さんありがとう。でもお父さんや他の人々もそれが讀めるかしら?」
「丁度お晝ですね」と母は言つた」「お父さんや叔父さんはもうすぐお歸りになるでしょう。そしたらこのこのようにリナの並べたものが、お父さんや叔父さんにも讀めるかどうか見ましようね」
「ああ、今でも此處にお父さんや叔父さんがいらつしやればどんなに嬉しいでしよう」
子供が丁度こう言つた時、彼等が部屋にはいつて來た。母が父や叔父に挨拶をすますや否なや、リナはしきりに母にねだるのであつた。はやくも母の着物を引張り、そして歎願するように高く見上げた。母にはその渴望的な眼差しの何であるかがすぐわかつた。そして父の手をとつて机の方へ連れて行き、同時に「お父さん、此處にリナは何と並べてありますか」と言つた。
父を見てそして „Lina„ と讀んだ。「おやリナ! リナはもう自分の名前が並べられるのかね。もうこんなに早く棒片で自分の名前が並べるようになつたのかね」
そこへ叔父もはいつて來てそして言つた。
「どれどれ、僕にも見せてごらん。なるほどね。Lina と棒片で並べてあるね」
一同は大へんな喜びであつた。
併し父は言つた。「ではリナ、お前の名前を並べるところを見せてごらん。お父さんは棒片をずらしてしまうから、もう一度並べてごらん」
「はいすぐやつて見ましよう」と言いながらリナは „LINA„ と並べた。
それから父と叔父とが交る交るに、この文字を聞いて見たり、あの符號を尋ねて見たりした。その度毎に子供は開いた音や閉ぢた音を指さしてはそれを言つた。今度は逆に彼等はリナの名前の音の一つ一つを聲高く言い、そして子供はそれに對して文字を並べた。
この喜びと嬉しさとを眞に味はいたい人は直接見なければ

解らないであろう。
併し母は言つた。「あなた方子供達よ、お晝飯のことなど忘れておしまいですね。御馳走がすつかり冷めてしまいましたよ」
一同は食卓についた、叔父が言つた。「お母さんはなかなか氣をつかうことが多いですね。リナちやんの世話をしたり、皆のためにお料理が冷えやしないかと心配なさつたりして。今日はリナちやんは自分の名前の並べ方や讀み方で皆を喜ばしてくれましたね。明日はひとつ mutter（おかあさま）という美しい言葉の讀み書きを覺えて喜ばせて下さいね」
「はい叔父さん、きつとそうしましよう」と子供は言つた。
このようにして皆にとつて、今日はまるで誕生祝いかのように、食卓が非常に樂しく喜ばしいものであつた。
その翌日のこと、注意深い母が日頃から子供と共に遊ぶために取つてある時間が來るや、子供は母のところへ飛んで來てそして賴むように言つた。
「ねえ！　今日は mutter（おかあさま）という美しい言葉を敎へて頂戴。そうすればお父さんや叔父さんがお歸りになつたらまた喜ばして上げられますから」
「ほんとにそれはリナが喜んで並べて見たい美しい言葉です。ではその並べ方を勉强しましようね」と母は言つた。
「だけど、もう一つ同じような美しい愛する言葉があります。それは何か、リナ知りませんか？」
「ああ知つてます。Vater（おとうさま）」
「そう。では今日はそれの並べ方を習いましようね。そうすればお父さんがお歸りになると、リナとお母さんとがお父さんのことを考へ、愛してることがよくお解かりになるでしようから」そこで先づ母は再び子供に V—a—t—e—r という言葉を明瞭に正しく言はせ、同時にどんな音が聞えるか尋ねた。子供は容易く a—e と返事したばかりでなく、直ちに「ごちんお母さあ、a の符號知つてよ」と言つて、それをすぐ母の前で机の上にAと並べて見た。
「上手ね、では今度はお母さんが e の符號も敎えて上げましよう」そしてそれをAから少し離れたところに並べた。

A　E

リナの熱心と母の助けとで間もなく、その言葉の中にまだあるvとtとrとの閉ぢた音と、それに對する三つの符號

V　T　R

が見出され、そしてやがて

V A T E R

という美しい言葉が彼等の前に並べられた。そして自分の名前の時と同じように容易に讀むことが出來た。たといずらされてしまつても、間もなくこの新しい言葉を自分で再び並べることが出來るほどになつた。
さてリナは今のこの喜びと、父や叔父が若しや今でも歸れば待ち望んでいる喜びとで、またも歡喜に充ち滿ちていた。これに依つて幸福な勉强好きな少女は益々進もうと努め

る。それで彼女は「お母さん、ねえ、お母さん！　でも叔父さんは mutter（おかあさま）という美しい言葉を並べるようにつておつしやつてたよ」と言つてねだつた。「ねえ教えて頂戴。そしたら今日叔父さんが見えたら、叔父さんを喜ばして上げることが出來るわ。また若し私がそれを並べられたらお父さんもきつとお喜びになるでしよう」

「いいですとも」と母は快く返事した。「ただ新しいものを習つて前のものを忘れないようにしなくてはね」

「決して忘れませんよ。決して。何だつたらお母さん何時でも聞いて見て頂戴。」

そこで母は先づ娘にその言葉を今一度ゆつくり正確に發音させ、そしてUとeとの音に氣を附けさせた。やがて子供はただ一つの新しい音（U）があるということに氣が附く。そして同時に母は子供にその符號を教へた。

Uと。そして二つの文字を少し離して並べ、リナにその通りに机の上に並べるように言つた。

U　　E

この言葉の中にあるもう一つの新しい音をも間もなく見出させ、そしてその符號　M　をも子供に習得させた。このようにして美しい言葉、

MUTTER

が間もなく完全に机の上に並べられた。子供は非常な喜びで、それを既に學んで覺えてる

VATER

と附け加えた。

その後で母と子供とは兩方の言葉の音や符號を何回も比較して、一つの言葉の中にある同じものと違うものとを探し出した。このようにして子供は並べ方と讀み方とが同時に正確になつた。

その喜びのところへ父が叔父と一緒に部屋にはいつて來た。

最愛な父と親愛な叔父との喜びを見た時の子供の眼はまるで樂しいクリスマスの朝のように、限りない歡喜と喜悅とに輝いた。

符號や音に就いて試驗されたが、リナは何時も結局はその問題を解決したから、遂には「この二つの言葉の棒片を全部崩してしまつてまた直ぐ並べて見たいわ」というようになつた。それほど彼女の喜びは非常なものであつた。そして實際言つた通りに棒片を全部くづして間もなくまた美しくきちんと皆の前に

VATER
MUTTER

と置きやがてまたその下に

LINA

と置いた。

そこで父は娘の名前に

LIEB
（アイスル）

という言葉を置き添へた。そして微笑みながら試すように尋ねて言つた。「お父さんの書いたものも讀めるかね。」

「初めの符號はもう知つてますわ」とリナは言つた。「次のもまたその次のも知つてます。ただ上の弓形が何の意味か解らないだけ」

母は言つた。「このように二つを結ぶものはieと長く伸ばす音の符號を示すものです。さあリナの知つてるところを言つてごらん。」子は「Lie」と言つた。母は「では唇を閉じてごらん。そうそう、もうそれでリナはその言葉をいうことになります。子供は「Lieb」と言つた。

さあ二つの言葉を讀んでごらん。と父が勵ました。

「Lieb Lina（かわいいリナ）と子供は讀んだ。そして愛らしく感謝に滿ちた顏つきで父に、母にまた叔父に身をよりそいながら、嬉しそうな眼差しで彼等を見上げ、そしてやさしく「愛するお父さん、優しいお母さん、親しい叔父さん！」と言つた。

「そうです、立派な兩親をもつことは子供達にとつて、何といつても大きな幸せです」と叔父が言つた。「ではリナちやん、明日も此等の美しい言葉が並べられるかどうか見せて頂戴ね。」そこで一同は靜かに食卓についた。

翌朝、母と子供とが一緒に仕事をするように決められた時間が來ると、リナの第一の心配は父や叔父の望みを滿たすことであり、彼等から望まれた言葉を並べることだつた。

それらの言葉と言葉の部分の正確な觀察とに依つて、リナは間もなく全體の符號を發見し、同時に僅かに二つの新しい開いた音と一つの閉じた音とを發見した。即ち「ei」の音の符號は EI であり「O」の音の符號は、O それから「h」の響きは H の符號をもつている。

此等すべては注意深いリナに依り、また眞心のこもつた母の導きに依つて間もなく學んでしまわれた。そして徹底的に繰に返し繰返し練習することに依つて、望まれた言葉が母と子供との前で机の上に次のように並べられた。

MEIN LIEBER OHEIM

（アイスルオヂサマ）

MEIN LIEBER VATER

（アイスルオトウサマ）

すぐにまた彼女は次のように續けた。

MEINE LIEBE MUTTER

（アイスルオカアサマ）

MEINE LIEBE ELTERN

（アイスルリョウシンヾサマ）

大へんな喜びだつた。併しもつと嬉しかつたことはその後、父が今日は何時もよりいくらか早く叔父と一緒に歸つて來て、そこに並べられた文字を讀み、その上にまた並べられたものに次のような言葉、

LINA IST UNSER LIEBES KIND

（リナハワタクシタチノアイスルコヂス）

を加え、そしてリナが母の助けで讀むことが出來た時だつ

た。というのはこの中で知らない符號はたつたSとKとDとの三つだけであることが發見され、そして優しい母は子供にそれをすぐに明らかにすることが出來たから。

さて父と叔父とは更に聲を立ててそれらの言葉を讀んだので、リナは母の手を取り、彼女の小さい仕事臺の置いてある窓の方へ連れて行き、低い聲で何かしきりにささやいた。母は優しく子供を眺め、そして指で仕事臺に二三の符號を描いた。滿足そうにリナは父のところに戻り、そして「一寸暫らく窓の方に行つてて頂戴。私また何か並べて見たいの。そして皆にそれが讀めるかどうか見て頂戴」と賴んだ。

母の靜かな助けで間もなく机の上に次のような言葉が並べられた。

DU BIST UNSER GUTER VATER

（アナタハワタクシタチノヨイオトウサマデス）

母はリナにたつた一つの新しい符號Gを示しただけだつた

「さあいらつしやいませ、お父さん、リナと私とが無言の言葉で何て言つてるか讀んでごらん」と母は言つた。

父はそれを讀んで母と子供とを抱いて言つた。「お前達は私の喜び、私の幸福。」

そこへ叔父が靜かに近寄つて來て。「おお、皆さんの幸福と喜びと平和との仲間の四人目に私を加へて下さい」と賴んだ。

「ああ叔父さん、あなたのこともほんとに考えてましたわ。でもお母さんがお食事が待つてるつておつしやつてますから、今はもうその言葉を作る時間がありませんの」

このようにして幸福な家族、幸せなリナは樂しい日日を送つた。彼女は絶えず自分の棒片の入つた小箱を手にしては、到る處で家族の人々の名前を並べようとした。そして彼等と全體との間柄（從兄弟であるか祖母であるか）を表はそうと試したりした。このようにして間もなく周圍の人々の中で彼女が棒片で並べることの出來ないどんな名前も、またどんな間柄もなくなつた。

○本誌の增頁と發展

本誌は、誌友諸君の御支援の下に、發行部數を加え、益々その使命を感じつゝあるが、本號卽ち九月號より、四〇頁に增頁し、一層內容の充實をはかり、幼稚園、保育所の實際家及び研究家諸氏のために、必要なる理論と適切なる實地とを以て、新しき幼兒保育の進展に貢獻し來々年を以て刊行まさに半世紀五十年の久しきに達する、我國最古の保育誌たる誇りにこたえようとする。古く親しき誌友諸氏の御高誼を謝すると共に、そのお力によつて、全保育界漏るゝところなく、新しい誌友を迎え得ることを切望する。

昭和二十四年九月

日本幼稚園協會

『幼兒の敎育』編輯部

第三回全國保育大會の記

全國保育連合會

全國保育連合會も第三回の全國保育大會を開くことになつて、誠にうれしいことと云はなければならない。

新潟——佐渡——唄の國

佐渡へ佐渡へと草木もなびいたか、千三百名の大盛會、七月二十八日、新潟では四十五年來の暑さだと云う。會場の白山小學校でうだる樣な暑さの中で熱心なる會が始まる。

第一日——開會式、

內山事務局長の開會の辭の前に、新しく發表された保育の歌「花のおさなご」の齊唱あり。

倉橋會長の式辭を小川副會長が朗讀し、厚生、文部大臣の祝辭、知事、市長の祝辭、民事部の祝辭あり。式をとぢて議事に入る。議長推擧——瀧澤正直氏を推す。

總會議題、1 議會へ代表を送る件、2 幼兒を通しての平和運動 3 保育者のアメリカ及內地留學の三件について活潑な討議あり、午前中に終了。午後は三つの分科會に別れて、熱心に協議を進めた。

第二日——午前中は昨日の續きの分科會、午後は各地區から出された方々による實際に卽した研究發表があつた。

夜は六時半から、鄕土藝術の夕が開かれ、越後獅子、佐渡甚句に佐渡おけさ等、ローカルな匂の豐かな御馳走に一同醉わされてしまつた。おけさにアンコールを送る等前代未聞の光景が開された。

第三日——記念講演會、山下講師、東北民事部ボッツ博士、新潟保育連合會代議員會が開かれて、本會の新しい機構が作られた、

會　長　倉橋惣三
副會長　附元彥太郎
同　根岸マツエ

事務局長　内山憲尚
同　次長　青柳義智代
事業部長　秋田美子
組織部長　田頭晴彌
庶務部長　山村きよ
財務部長　鈴木とく

▲別に事務局次長格役員一名をおく。

次回開催地は九州地區に決定した。

十一時から、閉會式が擧行され、ポッツ、クルース兩氏ら參加、山崎代表の謝辭あり、保育の歌をもつて式をとぢた。

佐渡見學――六百名と云う大勢で、佐渡としても終戰後始めての大團體である。島をあげての大歡迎、三時發の白山丸で荒海を渡る。少し波が高かつたので般内はおとない狀態にあつた。

六時前、兩津着、それぞれ、旅館に分宿する。八時から町の橋本座で歡迎會があり、土地の加茂湖會の若手連中が、兩津音頭やおけさを見せてくれる。熱心な先生たちは十二時半、一時まで、おけさの練習をしていた人たちもあつた。

見學第二日目は、早朝兩津を十四臺の大型遊覽バスにのつて、十時、金澤村着、金澤小學校に於ける歡迎會に臨む。古い傳統を持つ能と佐渡特有の文彌人形（のろま人形）の實演を見せて貰う。相川町から、尖閣灣を舟に分乘して觀光、夜は相川と河原田に分宿した。

第三日は相川を九時に發して、眞野の陵日蓮上人の遺跡等を見る。新穗村で、鄕土藝術、鬼太鼓を見せて貰う。二時に兩津に着いて、おけさ丸で新潟に向う。佐渡の人たちの五色のテープも美しく、螢の光のレコードと共に、なつかしの佐渡は視野から遠ざかつて行つた、

かくて、新潟第三回保育大會の三日の大會、二日の見學は感謝と感激の裡に無事に終つた。

今回の大會をお引き受け下さつた北陸地區の皆樣、ことに地元新潟の方々の御親切な心持ちと全力をあげての御働きに對して心から御禮を申し上げて筆を擱く次第である。

研究發表

一、幼稚園・保育所の一元的運營の實際について（東北地區）宮城縣鹽釜保育所長・聖光幼稚園長　齋藤久吉氏　**二、**北陸地方における幼兒の保育について　石川縣石川師範附屬幼稚園　新山澄子氏　**三、**樂しい園生活への導き　福井縣淀邊裕子氏　**四、**越後の保育と手づくりの玩具　新潟縣直江津町鎭・保育所　勝木とみ子氏　**五、**「あそび」の研究　山梨縣甲府市穴切幼稚園長　古屋喜男氏　**六、**園籍簿について　三重縣保育連盟會長　杉森武夫氏　**七、**園外保育の實際について　高田市高田幼稚園　竹下キク氏　**八、**幼兒發育の狀況といろ〳〵の觀察　富山縣福光町保育園　坂田登喜子氏　**九、**保育要領に表はれた「劇あそび」の實際について（關東地區）東京都港區西櫻幼稚園教諭　山村きよ氏　**十、**幼兒のうたとゆうぎについて（九州地區）福岡縣南薰保育園長　藤田貞雄氏

記念講演會

一、兒童の福祉について　東北民事部ポッツ博士　**二、**家庭生活の代行機關はあり得ない　新潟縣民事部民生厚生課長　クルース氏　**三、**幼兒教育における經驗の意義　日本保育學會副會長　山下俊郎氏

阪元彦太郎君を送る

倉橋惣三

前の文部省學校教育局初等教育課長阪元彦太郎君は、文部省組織變更と共に、岡山大學教育學部長に轉出せられた。同君の初等教育課長在任中、幼稚園教育のために貢献された多くの功業を憶うて、深い謝意を默し得ない。初等教育一般に對する功績は更めて言わない。また、同君が特に意を用いられた特殊教育上の功業についても、別に述べる場所があるであろう。茲には、幼兒教育に關する點において、その未曾有の功業を特筆せずにいられないのである。

學校教育法における幼稚園、その設置規則、保育調査委員會の設置、その結果としての保育要領の刊行、つゞいてその補修の着手、幼年教育研究會の開設、いづれも、同君の力を待たないものはなかつたが、その他、幼兒教育に關する同君の理想は、隨所にあらわれて一々擧げて數え難いといつた方がよかろう。

根本の革新に對する、大局的把握も、細部的苦心も、實に容易なものでないが、殊に總司令部との密接な連絡には、その局に當つたものでなければ測り知れないものがある。阪元君はその根本の方針と、實地の獨創と更に、表現の微妙とに、常に强固の自立を失うことなく、しかも、C・I・E殊に擔當のヘファーナン女史の深甚な信頼と圓滑な諒解の下に、一切を處理進行していたことは敬服に値するものであつた。

これらは、素より、君の教育行政官としての手腕によることであるが、君にこれらの功業をなさしめた大きな要因は何んといつても、君の性格に基く兒童愛と長き經驗に養われた教育現實感とであつたことを忘れてはならない。君は、行政官たるよりも實際教育家たることに眞の興味があるといつも語つていた。しかも、實際教育の精神こそが、君の教育行政を生命あるものにしたのだと言わなければならない。教育の法制から實際指導に移つて、益々多事ならんとする時、君を中央に失うは惜しまざるを得ない。しかも、これからの實際教育を充實させるものは地方の現地である。君をその現地教育に送る（再び）ことも意義少くないことであるまい。況んや、歴史を持つ岡山の幼兒教育を天下のために再興して貰うことは、筆者の心密かに希望しているところでもある。殊に全國保育連合會新副會長として、君の識見と手腕に期待すること大きい。

中央は學校教育局が初等中等教育局となり。新局長稲田清助氏の下に、新課長大島文義氏を以て、一段の活躍が準備されている。全國の幼稚園教育界は、此の新陣容に對する信頼と期待とを以て、今後一層の發展につとめるであろう阪元君も亦、變りなく我等と行を共にせられんことを。

子供讃歌

倉橋惣三

一　白線の青年

1　お茶の水幼稚園

あの、お茶の水の幼稚園へ、ひとりでよく遊びにる白線の青年があつた。明治時代のことである。

ふらりと、湯島通の門からはいると、すぐ庭の方へまわつて、幼兒たちのなかに交つて遊ぶ。一高の學生というので信用されたものか、おばさんのような先生方や、姉のような先生方とも懇意にされたが、一番親しみ迎えたのは幼兒たちであつた。

『おにいちやんが來た』

幼兒たちは彼のそばに集つて來ては、そういつてひつぱりまわした。なに一つ上手な遊び方を知つてはいないが、小がらで、ふとつて、まるい顏で、しじうにこ〳〵しているところが、幼兒たちにすかれたものか、どつちが相手をするのか、相手をされるのかわからない位、なかよしだつた。殊に、男の子たちは、やさしい女の先生ばかりの中で丁度この位の男の遊び相手がほしかつたのかもしれない。先生方もそこを利用して、

『さあ、おにいさんに、お角力をとつておいたゞきなさい』

といつては、地面の上に白チョークで大きな圓をかいて、土俵をつくつたりした。

藤の房が長く垂れて、美しい紫に咲く頃には、子どもたちを一人々々抱きあげて、手を花まで屆かせてやる。それ

がうれしいといつて、次から次へ、かわる〳〵抱いてもらいたがる。しまいには閉口して逃げだすと、それがまた面白いといつて、よけいに集つてくる。廣い藤棚の下を、子どもらに追いまわされている樣子がおかしいといつて、先生方が手をたゝいたりする。大銀杏の梢が明るく日に映えて、黄いろの葉がひら〳〵と舞つてくるのを、浴びるようにして、子どもたちと拾いっくらをする。にぎやかな笑い聲の中に、先生方の晴やかな聲もまじる。

青年は、保育室にはあまりはいらなかつた。その頃の保育は、かなりにきちん〳〵としていたもので、それを邪魔してはならぬと思つたのでもあろうし、フレーベル恩物や、こまかい折紙細工などは、彼には全くにがてであつた。でも遊戯室で遊戯がはじまると、誘い入れられてはにこ〳〵見物した。その誘い入れてくる主任保母さんは、雨森先生という、ほつそりした品のいゝ、もの靜かな年輩の人であつた。雨森さんは、青年の友人がおばさん〳〵といつていた人で、青年がこうして遊慮なくこの幼稚園へ出入りできたのも、その關係があつたためだつたかもしれない。もつとも、彼の子どもずきは前からのことで、一中の四年生頃から、その當時創刊間もなかつた『兒童研究』を、よく分りもしないのに月々購讀して喜んでいた。それに、どつちかといえば、おぼつちやん育ちの方で一高寮にいながら武道もせず、野球もせず、ストーム仲間にもはいらず、ひまがあれば、この幼稚園へ遊びにくるのを樂しみにするといつた、いはゞおとなしい青年であつたのである。彼が幼稚園に遊びにゆくのは、午後の授業の休みの日だつたが幼兒の圖畫や手技などを貰つてきては嬉しがつているのを、寮の同室の友人たちがよく笑つたものである。幼兒の粘土細工のへんてこな人形を、一つ呉れろよといつて表紙の破れたレクラムのそばに置いたりする、入浴ぎらいの男などもいた。

2　メドウ　キンダーガルテン

ある春のこと。彼は友人の小野といつしよに、成田在の三里塚牧場へ出かけたことがある。ロマンチストであつた彼等には、牧場（メドウ）というのが先づ大きな魅力であつたのである。二人は牛や羊の群について、廣い牧場を歩きまわつた後、輕く疲れたからだを、茅い若草の上に横にした。青く霞む空、かげろうの燃える野、ぽか〳〵と溫い春光を浴びながら、暫くうつとりとしていたが、小野が突然いゝだした。

『いゝなあ、僕は大學を出たら牧場をつくる』

小野は前から農科志望であつた。
『牛乳を澤山のませてくれるか』
この、のどのかわいた返事は、畫夢を滿足させなかつた。
『まじめな話だよ。……こんなに大きくなくてもいゝがね』
『うんと廣い方がいゝじやないか』
『そうだね。その中にコッテーヂも幾つか建てるよ』
手にしていたカッセル假とぢ本のウォルヅォース選集を、草の上へ輕くほうりだして、小野の方へ顏をむけた彼は小さい目を輝かせて言つた。
『僕にも、そのそばに幼稚園をつくらせてくれないか』
『そりやあいゝね』
『太い丸木の門柱を二本たてゝ。……牧場の名は何んとする』
『さあ。……君の幼稚園は』
『名前なんか無くたつていゝね。一方の門柱にメドウ、一方の門柱にキンダーガルテンと書いておこう』
『ハ、、、。それがいゝね。間の境は……』
『そんなものいらないよ。牧場全體が幼稚園の庭なんだもの』
『廣いよ』
『いゝさ、草一ぱいにね。丘もあり谷もあり……』
小野は目をつぶつて言つた。
『愉快だなあ』
それから春や幾春。小野が大學を出て、北陸地方の農學校長になつた時に、その學校のために彼が校歌を作詞するといつた風に、若い日の友情は長くつゞいたが、惜しむべし、夢のメドウは實現せずに小野は逝いた。再び春は幾春夢のメドウ・キンダーガルテンは……。

3　最初のペスタロッチ傳

青年が初めてペスタロッチ傳に接したのはこの頃であつた。夏休みにドガンプのペスタロッチ傳の英譯に讀みふけつた。彼はその後多くのペスタロッチ傳を漁り、その著作を研究した。しかし、この最初のペスタロッチ傳ほど、彼を純な感激に涵したことはない。それは、その時まだ教育學の學徒でもなく、專門的研究者でもなかつたからであるに相違ないが、敢て純な感激というのは、なんといつても、若さの皷動からであつた。

彼はいつも夏休を學校の課業に直接關係のない讀書の時間として、しつかりした、まとまつた書物を選ぶことにしていた。それが、それ〴〵の方面で、どの位青年の生命を培つたかしれない。どれも貴重な魂の糧にならぬものはなかつたが、たゞ攝取したというだけでなく、眞にその書にとらわれ、その書のとりこになつたといつていゝものは、このペスタロッチ傳であつた。とりこになつたのは、その一と夏ばかりではない。一生がそのとりこになりつゞけたといつていゝ。

彼は何事にも奮然として志を立てるといつた風の確乎たる性格の青年ではなかつた。また、深思して生涯の計畫を定めるといつた現實性の持ち主でもなかつた。だから、ペスタロッチに感激したからといつて、すぐに大教育者になりたいということを目的とした譯でもなかつた。いつてみれば、たゞ『その人』に陶醉したのであつた。もう少し深めていえば、以前から精神の師として敎えを受けていた内村鑑三先生の『後世への最大遺物』によつて、成功とか功名とかのほかに人生があることを、かすかながら考えていた彼が、ペスタロッチの生涯に成る安定を見出したのであつたろう。ドガンプの『ペスタロッチのライフとウァーク』は『この人』に近く接していた人の著述として、ウァークよりも、否、ウァークを叙しつゝ、恩師のライフへの敬仰のこゝろに溢れているのである。彼はこの本を誰れかに貸し失つて仕舞つたが、殆んど全ページに、殊に始めのノイホフの章や、中頃のスタンツの章に、若ものらしく赤や青のアンダーラインが色濃くひいてあつたことを、いまでも忘れない。勿論ペスタロッチの生涯はその事業を離れてはない。しかし、兎に角、彼は、その時から『ペスタロッチに醉える人』になつたのである。

青年が何んの機會でペスタロッチ傳に接したかは記憶にない。彼の所謂夏休の讀書は、どちらかといえば主として文學、殊にクラシックの方で、その頃出た德富芦花の『思い出の記』の主人公が、文學に志してその世界の餘りにも

無限なのに對し、茫洋の嘆という言葉を發しているのを、さも自分の文字のように口にしていたりしたのであつた。友人たちにも、大學では英文科の方へでも進むものと思われていた。それが、誰れに示され、どういうきつかけで、この本に接したものか、その機緣を思いだそうとして思いだされない。

人生、心の友を得るのも偶然が多いが、心の書を得るのも偶然が多い。おもうにこの書もつとめて蒔かれたのでもなく、勿論強いて植えつけられたのもなく、自ら選び求めたのでもなく、ふと風に運ばれた種子であつたのかもしれない。それがいゝというのでもない。彼はいつでも、そういう風に幸されている。恩惠はどこにあるか、はかり知れない。

彼の最初に讀んだ大敎育者傳がフレーベルであつたら、これから長くつゞくであろう此の物語りの書き出しとして、一層構成的妙を得られるかもしれない。しかし、物語りはそううまくばかり運ばない。それどころか、彼がフレーベル傳を讀んだ最初は、ずつと後のことである。彼は早くから幼稚園へ遊びにゆくことを好んだが、フレーベルの幼稚園に對する理會や、況んやそれに對する傾到を以てした譯ではなかつた。幼稚園よりも幼兒の群を訪ねたのである。幼い子ども達に遊ぶために、幼稚園へ出かけたのである。これは、フレーベル傳を早くから讀んでいなかつたためかもしれないが、思へば、それは彼のために、少くもよくないことではなかつた。後の彼は、言うまでもなく、フレーベルの研究者であり禮讃者を以て自ら任ずるようになつた。ペスタロッチよりもフレーベルの方に通じているかも知れない。キンダーガルテンの名稱をフレーベルのオリヂナルにおいて魅力を感じる彼であるけれども、そのフレーベルの幼稚園を見にいつたら、そこに子どもがいたという譯ではない。名山の名にひかれて花を訪ねたのでなく、花を見にいつたら名山だつただけの話であつたといおうか。それも彼のためによくないことでなかつたばかりか、却つてよいことであつたかもしれない。彼は後になつても、キンダーカルテンの名づけ親はフレーベルだけれども、フレーベルに幼稚園を創設させるものは幼兒そのものだと常に言つているが、彼の幼稚園通いも、フレーベルに導かれたよりも、子どもに導かれたのが、抑々の初めだつた。そうこうしているうちに、はからずも此の最初のペスタロッチ傳に、めぐり逢つたのである。それでこそよかつたなんて決していわないが、兎に角、そうだつたのだ。

（つゞく）

× × ×

講話

幼兒の心理的發達（五）

東京家政大學教授　山下俊郎

四、四歳兒の心理的發達

四歳すぎると幼兒の心理的發達はます〳〵めざましくなつて、どの方から見ても非常に活潑な心の動きが見られるようになる。ことに知的な方面のこゝろの動きはずい分活潑になつて來るのでアメリカの學者は四歳兒は「發見する」Find ing out 子供だと云つている。この四歳兒の心理的發達のありさまを、また四つの方面から一通りながめ渡して見ることにしたいと思う。

(1) 運動的發達

運動の發達は四歳兒になると一層いちじるしいものがあるので、幼兒たちの動きは非常に活潑さの度を加えて來る。ひろい庭へ出ると盛にかけまわる、すべり臺やブランコをめがけて突進する、という風に動きが大變はげしくなつて來ることが觀察されるのである。

このような動きのまず直接的な要素であるところの全身運動から觀察して見よう。階段をいきおいよく昇つたり降りたりする、すべり臺のはしごをよじ登る、すべり降りる、ジャングルジムに登り、降りる、というような活動は大體三歳兒頃の子供でも、半分位の子供には出來る。しかし四歳すぎてからが本格的の動きに入つて來るので、ます〳〵このような運動の力を幼兒達が身につけつゝあることが觀察されるのである。

このような全身運動の中には、手脚を動かす部分的な力のほかに、全身のバランスをうまくとるという大事なはたらきがはたらいている。そして幼兒達はこのようなバランスをとる事を必要とする運動をこの年令になると非常に喜ぶものである。このような動きをよくあらわすものに、スキップがある。スキップは普通の發達をしている子供だつたら四歳すぎたならば充分に出來るのが標準である。この年令になれば、

また幼兒たちはとぶことを大變よろこぶ。立ち巾飛び、走り巾飛び、いずれも拙いながらもやつてよろこんでいるのをわたくし達はよく見受けるのである。とぶことは四歳兒になると大部分の子供が出來る。ガッタリッヂの報告によると四歳兒の七二%は上手に飛ぶことを充分身につけている。して見ると四歳兒ではとべない幼兒の方が發達のおくれた子供だといわなければならない。からだの平均をとるということに興味を持つているこの年令の子供は、また片脚で立とうと一生懸命にやつて見る。しかし、これはまだ十分には出來ない。ちよつとの間だつたら立つていられる位の程度である。

この種のいわば平均運動というべきものにいわゆる平均臺渡りがある。古く、ボールドウィン、ステッチャー兩氏が行つた幼兒研究の中に、平均臺渡りを實驗的に調べたものがある。幼兒の平均臺渡りは五つの段階にわけられる。第一は、兩脚そろえて平均臺の上にのることの出來ないもの、第二は兩脚そろえてのるが、ふつうの歩き方では渡れないで、かにの横ばい式に横向きになつて脚をひきずつて行くもの、第三は、まつすぐに向いては歩くが、丁度二歳兒の階段昇りのように片方の脚はいつでも、もう一方の脚のあとについて行くという式のもの、第四は、右左とかわりばんこに脚をふみ出して行くが、のろ〳〵と下手で、ときには脚をふみ違えるもの、第五は完全に兩脚を交互にふみ出して先ず大體はなめらかな動作で渡つて行くものという風に、五つの段階が認められるのであるが、この五つの段階の第一のものに一點、第二に二點、第三に三點、第四に四點、第五に五點という點數を與えて、各年令別の平均點を見ると上の表のような結果になつている。この表にあらわされている所を見ると、三歳兒と四歳兒との間にはずい分大きな開きがある。三歳兒は二・三點、四歳兒は四・二點である。これを言葉に直して見ると三歳兒はさきの第二段階即ちかにの横ばい式段階の近所にいるが、四歳兒はもう第四段階をちよつと出た所、即ちどうやら兩脚をかわる〳〵ふみ出せる所に迄發達しているわけである。このあたりの所に、四歳兒が、バランスをとるような運動に大變興味を持ち、そしてそれが可なり出來るように發達しているということが、數字の上にはつきりと示されているのを見るのである。

平均臺渡りの發達

年令	得點
2才	——
3才	2.3
4才	4.2
5才	4.8

全體的に考えて、全身運動は、二歳頃に於ける歩行運動の一應の完成から更に一歩ふみ出して、四歳頃までの間に更に一段の發達をとけ、今度はこの發達した運動を土臺として更に一層活潑な動きが幼兒の生活の中に展開されることによつて、大まかな筋肉をつかう大きな運動が身につけられて行くものであると考えられる。幼稚園時代に出來るだけ大きな動きを與えような遊具や遊びを考えた幼兒教育の先覺者ホールやヒルという人たちの卓見は新しい現代の心理學の知見によつて裏づけられている。

全身のバランスと、手先きの動きとの組合わされた形の運

動にボールを投げることがある。四歳兒はボールを投げるときに、いわゆる上手投げが出來るのが普通である。また大きな箱積木や序積木を運んだり、積んだりすることも同じような運動的要素を含んでいるが、四歳兒はこのような大きな積木を扱うことに非常な喜びを感じるものである。

次に、手先きの運動、いわゆる巧みさといわれる細かな運動について少し觀察して見よう。

四歳兒は、すでに三歳の頃に使えるようになつたはさみを使つて、色々の形の切り拔きをすることが出來る。正方形のお手本を見せると、これを模寫することが出來る。また、ひもを結ぶということも、固結びだつたら出來る。お辨當の風呂敷を結えることも固結びでたて結びだつたら充分に出來る筈である。勿論、敎えてやればたて結びでなくて當り前の結び方が出來るわけである。

運動的發達の間からながめた四歳兒の發達的特質をひろつて見ると、大體右の通りであるが、このような特質にしたがつて保育の實際問題が考慮されなければならない。

(2) 知的發達

知的發達に於て、四歳兒は最初に述べた「發見する」子供と言われていることに見られるように、更に一段と活潑な發達のようすを示している。

まず、數えることについて述べると、三歳兒では四つまで數えることが出來ていたが、四歳兒になければ、十三まで數えることが出來る。すなわち、十以上を數えることが出來るようにすゝんで來たのである。さらに實際的な思考力の發達の一つの面として、比較作用の發達が見られる。例えば、ビネー式のテストの問題に、同じ形、同じ大きさで、重さのはつきり違う二つの箱を幼兒の前に出して見せ、「どつちが重たいでしよう、重たい方の箱を渡して頂戴」という問題がある。三歳兒はこのような問題を出されたとき。たゞ箱を見ているだけで、比較するということが出來ない。ところが、四歳兒になると、兩方の箱を兩方のてのひらにのせて見るとか、代りばんこに持つて見るとかして、兩方の箱を比較して見て、重たい方を選ぶという、比較作用が出來るようになる。與えられた場面と問題に對して、これに應じた思考のはたらきがはたらくようになつた一つの面を示している。

次に、記憶の發達を示す事柄を觀察しよう。三つの數字、例えば三、六、八、というような數字を讀んで聞かせ、すぐその後、これをその通り言わせるということをさせると、四歳兒は充分な記憶（直接記憶という）を示している。また、三つの命令、例えば「この鉛筆を向うの机の上にのせて、あそこの窓をしめて、そこにある本を持つて來て頂戴」というような命令を出し、これをもう一度くり返して言う。つまり二度說明してやると、四歳の幼兒は、これをその通りに實行することが出るのが普通である。

知的發達の面で、四歳兒に於ける言葉の發達は注意さるべきであろう。その一つの面として先ず語いの量の上に大きい

發達のあとをわたくし達は見ることが出來る。久保良英博士の研究によると、二歳から六歳までの語いの數の發達は次の表のようになつている。一年毎の語數の發達量を見ると、三歳及び四歳の所、ことに四歳の所が一番大きい。即ち三歳から四歳の間に於て幼兒は一番たくさんの言葉を覺えるわけである。五歳、六歳になつて語いのふえ方がそれ程いちじるしくないということは、大體、四歳頃までの間に、幼兒は日常使う範圍の言葉を一通り身につけてしまうものであることを示すものであると言われる。このように考えると、四歳兒の言葉の教育に於てはこのようにして幼兒が身につけた言葉をさらに豐かにして、さらにしつかりしたものにしてやるようにするという方向がとられなければならないことが感じられるのである。

發達の語りの

年令	語い總量	年々增加量
2オ	295	—
3オ	886	591
4オ	1675	789
5オ	2050	375
6オ	2289	239

言葉の發達の中で、もう一つ四歳兒に於て注意しなければならないのは、發音の發達のことである。元來幼ない幼兒にはいわゆる舌のまわらない發音がつきものである。オサカナをオチャカナ、タクサンをチャクチャン、といつたり、コドモをコロモといつたりというようないわゆる赤ちやん言葉が多い。これは本來發達の低い段階では、一般の運動の發達が充分でないのと同じように、發音器官を動かすことが充分に出來ないことの現われである。ところでこの赤ちやん言葉は大體四歳から五歳の間には卒業するのが、一般の標準である。牛島義友氏等の研究によつて赤ちやん言葉を話さないで大體完全な發音をする幼兒の百分率を年令別に見ると次の表のようになつている。すなわち、四歳ではちやんと發音出來る幼兒は五〇%であるが、五歳になると九五・五%に達している。したがつて、四歳から五歳の間に大部分の幼兒は、ちやんとした發音をするようになり、赤ちやん言葉を卒業するわけである。このことは、外國の幼兒研究の結果でも、大體は四歳から五歳の間に、赤ちやん言葉はなくなるのが普通であるとされているので、日常生活のための道具としての言葉が、この年令に大體完成されるという所に精神發達全體の上から見ての大きな意味が認められることを示すものであると考えていゝであろう。

音の發達

年令	%
2オ	0
3オ	27.5
4オ	50.0
5オ	95.5
6オ	85.0

四歳兒の知的發達に於て次に注意すべきことは質問の發達である。一般に心理學者は三、四、五歳の時期を質問期と名づけている。四歳兒はまさに質問期のまつたゞ中に居るわけである。實に盛に色々の質問をする。從來調べられた多くの學者の研究によつて見ると、この時期の幼兒達の話す會話を丹念に記錄をとつて、統計的に分析した結果は、大體二〇%内外が質問によつて占められている。これ程質問が多いということは、幼兒達の心のうごきを示すものとして注目されな

ければならない。一體質問というものは、子供達の心が自分の生活している環境に對して眼を開いて來たことを示すバロメーターである。生れてから現在までも子供の身のまわりには雨もあり、風もあつたのであるが、これに對してほんとに心の眼が開けて來ない間は質問は起らない。眼が開けて來るとそこで「雨はどうして降るか」「風はどうしてふくか」という質問が出て來るわけである。質問期のまつたゞ中にいて盛に質問している四歳兒は、まさに心の眼が開けて氣て、環境に對して心が動きかけこれを探求しようとする知識慾の芽生えが盛に芽生えつゝある所である。質問は大切に取扱われなければならない。たゞし、質問はたゞこれに對してよく答えるということでは決していゝ態度だとは言えない。むしろこの質問を通して外の世界に對して活潑に動いて來つゝある子供達の心が、もつと積極的に動いて知的發達の道を進んで行くことが出來るようにする爲には、質問をきつかけとし、これをふみ臺として、觀察の心がすすめられ、經驗の深さが深められて行くように工夫することが心要であろう。

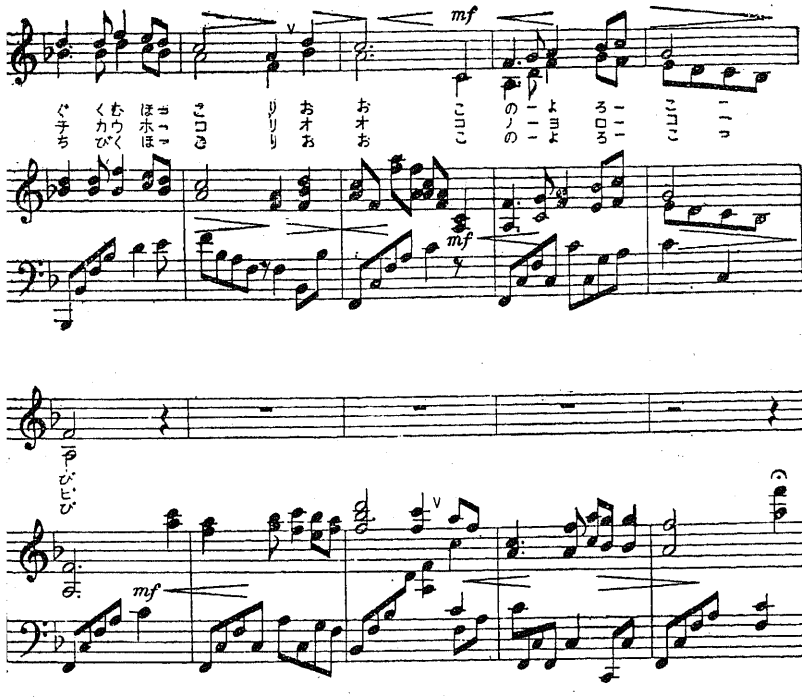
知的發達に於て、四歳の思考力を觀察する一つの例を最後に擧げて見よう。上に掲げた圖のようにS字狀に曲げた針金のかぎを兩端に持つひもをコップの柄の所に通して、ひもの兩端のかぎを椅子の背の所にひつかけて置く。そして、「そのコップをとつて頂戴」という問題を幼兒に出す。その解決は、S字狀のかぎを椅の背から外し、これをコップの柄の中をくぐらせてコップを外せばよろしいわけである。この解決は、いうまでもなく、椅子とかぎとひもとコップというこの四つのものゝ關係をはつきり觀察し、見きわめた推理によつて到達し得られるものである。このような具體的思考能力の段階が四歳兒に於ては期待されるのであつて、三歳兒に於ける段階と比較して見ると、その發達的意義がはつきりとつかまれるであろう。

四歳兒の知的發達は以上眺めて來たように非常な進展を見せている。後に開けて來る知的な精神生活の第一準備期とも考えられるが、むしろこれを遙かに豫想しながらこの時期はこの時期として幼兒的な活潑な知的生活が展開されている意味に於てまさに「發見しつゝある」幼兒の時代であることをわたくし達は注意しよう。

戸　棚　學級文庫、圖書室、教材陳列棚等學校必需の備品である。

机　椅　子　教授用、事務用として學校必需の備品である。

用　紙　除外規定中新聞用卷取紙の次に教科書用教育用を追加されたい。



前奏につづいてⅠⅡをつづけて歌い，再び前奏をひき（後奏をひかないで）Ⅲを歌い後奏をひいて終るようにして下さい）

花のおさなご

櫻井鱗子

一

あけぼのの　光にもえて
　　咲きいづる
花のおさなご
あたらしき　のぞみの　めばえ
　はぐくむ　ほこり
　おお　このよろこび

二

ももくさの　ふたばはのびて
　　とりどりに
花のおさなご
たのもしき　おくにの　ちから
　つちかう　ほこり
　おお　このよろこび

三

あおぞらの　光はうらら
　　よにひらく
花のおさなご
手つなぎの　たのしき　つどい
　みちびく　ほこり
　おおこのよろこび

花のおさなご

（全國保育連合會制定保育歌）

大中寅二曲

清く温かき心で（♩=90）

Sop

Alt

あけーぼの　のひかり
あもーくさ　ノヒかタ
あおーぞら　にハは
もう　りバり
えら　てら　さトよ　きりに　いドひ　づりら　るこく　はハは　なナな　のノの　おオお　さーー
ーー　ごゴご　あタき　たノっ　ーらーしー　ーーなーぎー　きキの　のオた　ぞクの　みニし　のノーめー　きーつー　ばカど　ーえらい　はソみ
なナな

記錄

第三回全國保育大會

昨夏の奈良大會以來の待望の第三回全國保育大會は、豫定の通り新潟市において、七月二十八日から四日間千數百の參會者を以て最盛大に開催せられた。その實況は別項報告の通りであるが、前日二十七日の理事會代議員會を始め、二十八日、二十九、三十日のそれ〴〵の日程に基く總會、部會、研究發表會、紀念講演會いづれも、充實した大會の意義を擧げ、更に引つゞいての、佐渡島（二泊三日）及良寛上人舊跡（一泊二日）の見學も、各班いづれも滿幅の感興を以て、活潑なる協議と和氣あい〳〵の裡に無事終了した。準備にあたられた地もと連合保育會事務諸君の、言辭につくし難い勞を謝すると共に、斯くて年々の盛況が、また來年の九州において、如何に一層の進展を生むであろうかを豫想しつゝ、新潟大會の大成功を心から祝するものである。

日程

第一日——開會式（前九—一〇）總會（前九—一二）
分科會（後一—四）各種團體懇談協議會（後四—六）

第二日——分科會（前八—一〇）研究發表會（前一〇—後一）
各分科會連絡會（前一〇—一二）總會（後二—四）鄉土藝術の夕（後六—九）

第三日——紀念講演會（前八—一一）閉會式（前一一—一二）
見學視察に出發（午後より佐渡班、彌彦、國上班）

開會式順序（七・二八前九—一〇）

1、開式の辭　　內山全保連事務局長
2、式　辭　　倉橋全保連會長
3、經過報告　　瀧澤大會地元準備委員長
4、祝　辭　　新潟民事部長・厚生大臣
　　文部大臣・日本社會事業協會長・新潟縣知事・新潟市長
5、祝電披露
6、閉式の辭　　堀全保連理事

議事（七・二八前一〇—）

1、議　長
副議長（二）（組織決定）
書　記
2、議長、副議長挨拶
3、會務報告　　櫛大會準備事務局長
4、議案上程
5、部會構成（議長、副議長、書記）
　第一分科會、第二分科會、第三分科會
6、各分科會議長報告

7、決定

式辭

こゝに第三回全國保育大會の開會にあたりまして先づ御參集の滿堂の皆様の御健康と幼兒保育に對するたゆみなき御熱心に對して心から敬意を表します。（中略）今日幼兒保育の大切なることを理解しないものはない筈でありますが、國事多端、盡して幼兒にまで及び足りない風がまたないともいえません。若しこの人生の重要な初期、國民の貴重な萠芽の保護培養に少しでも缺けるところがあつたり、國家再建の大計畫において悔を將來に殘すことがないと誰れがいへましようや、われらの慮るところ、また屢々憂うるところ常にこゝにあるのであります。

この大會は數日でありますが、相議し、相語られるものは平素のうん蓄であり。將來永遠の計であり、殊にこゝに盛り上る集結の力總合の力は必ずや天下を動かすものでなければなりません。しかも亦互をむすびつけるものは親しき同志愛であり、志の歸するところはやさしき幼兒愛の實現であります。この會場に漲るものが、あいあいたる和氣に情意疎通の凉味である事を疑いません。しかしこの大會の美事な成功の基をなすものは一つに主催ブロックと地元各位の御盡力の賜でありまして、一年に亙る周到な御準備と開會にあたつての行き屆いた御斡旋と、すべてを一貫する限りないお心づくしに對して厚く御禮を申上げなければなりません。おわりに私は（中略）遙に新潟大會の盛大な光景と皆さんの御元氣とを想見して、我國保育界のために大いに感を強うしてをります。また獨りひそかに思う、

荒海や佐渡によこたうあまの川
日本保育界の大きい星、小さい星一堂につどい群れ輝いて何たる豪華な壯觀がくりひろげられていることであろう。

全國保育連合會々長　倉橋　惣三

厚生大臣祝辭

（前略）現下の我が國の情勢は經濟的にも社會的にも多くの難問題が山積してわが國民生活に及ぼす影響は極めて深刻なものがあると申さねばなりません。殊に乳幼兒を抱え生計を維持しなければならない未亡人あるいは生活におわれて愛兒を顧る暇もなく職場に働く婦人の數は日日增加いたしており、これらの兒童殊に母親の保ごを必要とする乳幼兒がともすれば放任せられ、周圍の環境、保健問題等においても殆んど顧みられない現狀はまことに憂慮にたへないものであります。このような情勢下におきまして政府は遠大なる理想の下に次代を擔う兒童の福祉を增進するため當面する諸問題の解決に極力努力いたしておるのでありますが、これが所期の目的を達成するためには國民一般の積極的なる協力に俟つべき事は勿論、特に諸種の保育施設において直接兒童の保育に從事しておられる皆様方の御協力に俟つところが極めて多いのであります（中略）

本日より三日間にわたり當面する乳幼兒保育の諸問題、保育の實際等の諸方策について研究協議をなされるということでありますが、これは時節柄極めて機宜を得た企てでありまして（中略）こゝに會同されました皆様方におかれましては、その課せられた責務の重大なる事に思いを致され、この大會を機會に保育に對する使命感を新たにし今後ます〳〵兒童福祉事業の飛躍的發展のために一段と御努力を傾注せられんことを衷心より希望して祝辭といたします。

厚生大臣　林　讓治

文部大臣祝辭

（前略）幼兒の時に受けた教育がその人の人間形成にいかに大きな影響を與えるかは幼年時代を回想する時誰れしも思い半ばにすぎるものがありましよう。過去においてわが國の就學兒童保育は學制上とくに學校教育の一環としての取扱いを受けていなかつたのでありますが、さきに施行せられた學校教育法によつて保育施設の一つである幼稚園が學校として認められ、學校教育の系統の中にその位置を與えられましたことは、兒童福祉法の制定と共にわが國における保育に畫期的な進歩を約束するものであると信じます。しかしてこれらの新制度を有效適切に活用したその精神を生かすためにはひとえに保育の實際面にたづさわつている人々の熱意と努力に俟たなければなりません（中略）

今日の如くきびしい社會の現實にあつて幼兒をすべての惡から完全に守り心身ともに健やかな育成を目ざして保育の職責を全うし、さらにそれ〴〵の施設を整備しその圓滑な運營を計ることは眞に容易のわざではありません。しかしながらこうした苦難の現狀のうちにこそ一層切實に保育本來の使命が感ぜられると共に、保育の重要性に對する一般社會の認識も深められて行くのではないかと思われるのであります。各位におかれては深くこの點にかんがみ、自己の使命に生き幼兒に對する深い愛情に訴え相互の協力親和によつてよく大會所期の目的を達成されんことを切望する次第であります。

文部大臣　高瀬莊太郎

提出議案

1、國會へ保育代表の議員を送る件
2、幼兒を通しての世界平和運動促進の件
3、保育者のアメリカ派遣と內地留學について

分科會議案

經營組織（第一分科會）保育理論（第二分科會）保育の實際（第三分科會）に關し、總計八十四案件が提出された（詳細略）

宣言文

新日本建設の基礎は幼兒の教育にあることを信じ、私達は左の二項達成を誓います。

一、幼兒のよき父母となり兄姉となつて美しく逞ましい芽生を伸ばすことに全力を捧げます。
一、幼兒のよりよき環境を與へて正しく大きく育成し文化國民の基礎を作ることを期します
右宣言致します

第三回全國保育大會

研究發表會
記念講演會

細目別項「全國保育大會の記」參照

大會付帶行事

(イ) 兒童福祉講演會(七・二八午後六)勞働會館
(ロ) 兒童福祉綜合展覽會(七・二七—三一)小林百貨店
(ハ) 兒童福祉映畫會(七・二八午後八)勞働會館
(ニ) 鄕土藝術の夕(七・二九午後六)白山小學校
(ホ) 全國保育連合會理事會(七・二七午後一)小林百貨店
(ヘ) 大會代議員會(七・二七午後三)小林百貨店

全國保育連合會
昭和二十四年度總會

一、期　日　昭和二十四年七月二十七日午後三時
二、會　場　小林百貨店五階
三、構　成　全國保育連合會代議員
四、順　序　司會　田頭晴彌
1、開會の辭　青柳義智代
2、會長挨拶　倉橋惣三
3、事務局長挨拶　內山憲尙
4、各部報告
イ、組織部
ロ、事業部
ハ、庶務部
5、各地區保育
6、議事
イ、會則改正の件
ロ、決算、豫算の件
ハ、役員改選　長沼依山
ニ、その他
7、閉會の辭

新役員決定

別項、「全國保育大會の記」參照のこと

保育の歌の新制定

全國連合保育會では、保育の歌の制定を企て、豫て廣く歌詞募集中のところ、大阪審査員の審査の結果、大阪府豐能郡箕面村櫻井、若葉幼稚園の櫻井麟子氏の作「花のおさなご」

を以て當選とし、大中寅二氏に作曲を委囑し、第三回全國保育大會において發表、最初の合唱をした。歌詞及び曲譜は別項の通りである。保育の會合に廣く用いられるのである。

日本幼稚園協會保育講習會

本會主催の恒例夏期保育講習會は、豫報の通り、七月二十一日から二十五日まで、東京、お茶の水女子大學において開催せられた。阪元彦太郎、齋藤文雄、牛島義友、戸倉ハル、菊池ふじの、及川ふみの諸講師、熱心に講演と指導とにあたられ、全國から來會せられた九百の會員は、例年に變らない精勵と、特に、本講習に對する親愛とを以て、酷暑の五日間をものともせず、有意義に講習を了えられた。本會は、全講習員諸君の御健康を祝し、來年の夏の再會を今から樂しみ待つている。

官廳公示連絡事項

資格のない幼稚園の先生と新免許狀

文部省から八月三十一日次の告示が出たが、これによつて八月三十一日現に幼稚園の教員として都道府縣監督廳に屆出ている者は、免許法附則第四項によつて十八歳未滿の者も新制高等學校を卒業しない者も（舊制中等學校を卒業しない者や小學校を卒業したのみの者でも）新免許狀（臨時免許狀）の授與を受けることができるようになりました。（免許法施行法第二條第三十四號參照）その上免許法施行法第七條によつて、教育經驗年數と學校教育修業年數（その人の小學校から最終學校の卒業又は修了までの年數）とによる年數（施行法第七條第一項第七號、同第二項、參照）と、文部省令で定める講習の課程を修了すれば、教育職員檢定によつて更に上級の免許狀を得られる途もひらけるようになつたわけです（文部省初等中等教育局、玉越事務官談）

文部省告示第一七三號

學校教育法施行規則（昭和二十二年文部省令第十一號）第百五條第二號の規定により、幼稚園助教諭假免許狀を有する者とみなすものを、次の通り指定する。

昭和二十四年八月三十一日　文部大臣　高瀨莊太郎

昭和二十四年八月三十一日現に幼稚園教員免許狀を有しないで、幼稚園教員の職にある者

教育用品の物品稅免除について

物價の昂騰に伴う教育費の增大は、國民のひとしく困却するところであるが、これが輕減の一助として先回、文部省においては教育用品の物品稅免除に關して左の通り大藏省側に申入れをなした。

發施第一一九號

昭和二十四年七月二十七日

管理局長
初等中等教育局長

大藏省主稅局長殿

教育用品の物品稅免除について

「經濟文化政策等の見地より稅制改正を要望せられる事項」として六月八日で本省總務課長あて照會があり、これに對し六月二十九日附（次官名）七月十二日（總務課長名）官總第八號をもつてお願いしておいたのであるが、教具、學用品等の教育用品に關する物品稅の免除若しくは輕減については、新教育制度による教育が教師指導のもとに、兒童・生徒自らの經驗、思考を基礎として教育目的、目標に到達せしむるものであり、したがつて指導用にも學習用にも以前に增して多種多用の教育用品を必要とするが、現下の貧弱な教育豫算では到底これらの用品を購入することができず、いきおい、その他の寄附金にまたざるを得ない結果、物價の昂とうと共に益々國民の教育費の負擔を增大させ教育の危機の聲さえきくに至つた現狀に鑑み、更に從前の實績狀況等も合せ、教育費負擔の輕減を圖る上から、當省としては別紙の通り物品稅法の改正を希望するにつき、今後の改正に當つては特別の御高配を願いたい。

なおこの依頼は、上記の依頼に對する補足說明として送付するものであるから念のため

別紙

一、物品稅法第十三條及び同施行規則第二十六條の免稅規定はそのまゝ存置されたい。

二、教育用に供する物品の免稅を受ける對象を幼稚園、高等學校並にこれに準ずる學校（盲學校、聾學校及び養護學校の幼稚部及び高等部）にも擴張されたい。

理由

（一）幼稚園について

幼稚園は學校教育法第一條に明示するように、學校體系の一環であり、幼兒を保育し、適當な環境を與えて心身の發達を助長することを目的とし（學校教育法第七十七條）更に教育職員免許法による免許狀を有する教員によつて教育を行う純然たる教育機關である。

したがつて現在では既に一部有產階級の子弟のみを收容した施設ではなく、殊に現在の社會情勢下、就園希望者は激增し、年々園數も增加の一途を辿るのみで、名實とも幼兒の教育機關である。

當省としては、これら幼稚園の健全な發達を企圖するものでありかゝる幼稚園の用に供する教育用品の物品稅の免除を希求する。

（二）高等學校について（略）

三、物品稅法施行規則第二十六條第四項に被免稅教育機關の使用するものとして左の物品を追加せられたい。（保育用に關係うすいものは略す）

（三三頁余白へ）

會から

○九月の秋のいゝ季節に、皆さまは一層の御健康と御活動のことゝ思います。子どもたちも益々元氣に、豐かなみのりを見せてくれます。先生方と子どもたちと、どちらが元氣か、子どもの元氣はいつでもです。先生元氣だなあと、子どもたちを驚かせたいのです。

○この夏の新潟大會は、御出席の千餘の方々は勿論、その他の方々にも保育上の活力を添え又促すこと大でありました。新潟の大會のみでなく、各地にもそれ〴〵講習會なり會合なりが活潑に行われたことゝ思いますが、それらの研究なり協議なりは、先づ新保育期からその結果をあらわさずにいないでしょう。

○大會の詳細な記錄は、新潟の方で御準備になっていますので、皆でそれを待っていますが、本誌にもその大略を記錄しました。ラヂオのように實況放送といかないのは殘念です

○七・八の合併號、日本保育學會特集號はみのある内容を以て、御精讀を得たことゝ思います。保育直接の方々ばかりでなく、教育界の貴重文獻として自認しているものです。いろ〳〵の條件がゆるされて、英語版を海外に送りたいと常に思っています。保育の學問化をめざしてつとめている會は、又その年級的記錄は世界にも少いものです。

○本號から二つの連載を掲げ始めます。莊司雅子さん（廣島大學にその人ありと知られているフレーベル研究家、「リナ」はフレーベル全集中でも有名のもの、それの全譯ですから毎號引きつゞきみっちりと精讀していたゞきたいと思います。倉橋主幹のは、小閑を利用しての執筆で、「リナ」とは別の意味の輕いつゞきものといったものです。誌面を邪魔しない程度で長くつゞけられる筈です。

○本號から、豫て申上げた通り、ページ數を増しました。從つて定價も少し値上げになりますが、内容の充實につとめますので、從來にまして御愛讀願うと共に、新しい讀者を一人でも多くおすゝめ下さい。

『幼兒の教育』編集

編集主幹　倉橋惣三

協力委員　牛島義友　及川ふみ　齋藤文雄　多田鐵雄　波多野完治　山下俊郎（五十音順）

編集部員　西山浪太郎

日本幼稚園協會

幼兒の教育　第四六卷　第九號

定價　金參拾圓也

昭和二十四年九月十五日印刷

昭和二十四年九月二十日發行

東京女子高等師範學校附屬幼稚園内
編集兼發行者　倉橋惣三

東京都千代田區神田神保町二ノ四
印刷者　佐野眞一

東京都千代田區神田神保町三ノ二九
印刷所　明和印刷株式會社

東京都文京區大塚町三十五
東京女子高等師範學校附屬幼稚園内
發行所　日本幼稚園協會

東京都千代田區神田神保町二ノ四
發賣所　株式會社　フレーベル館

電話九段(33)三九七一番
振替東京一九六四〇番

○本誌御購讀について注文申込その他は凡べて發賣所フレーベル館宛に願います

責任をもつておすすめするフレーベル館の保育用品

マンテン・クレオン

八色一箱・定價二八圓・送料一二円

材料と色を特に吟味して製造したものです。幼稚園用として他に類を見ぬ優秀品。

出席カード

A5判一三枚組・定價二五圓・送料六円

當館獨特の企畫による類例のないもの。園兒の出席を自づと促進するやうな仕組みの特許ずみの製品です。

ぬり絵

卷1 鈴木壽雄 初級用畫

卷2 澤井一三郎 上級用畫

各A5判一六枚一冊・定價二五圓・送料六円

當館獨特の企畫によるヌリエです。上質紙使用。

自由畫帳

B5判・一五枚一冊・定價二〇圓・送料六円

どこまでも描きよいやうに使ひよいやうにと心を配つた畫帖

手技用おさいく帳

一冊十二枚・定價二〇圓・送料六円

切り抜きや折紙をはりつける御子樣の最もよろこぶ美しい帖面です。

貼紙

一〇〇枚一袋上質艶紙使用・定價一五圓・送料六円

色々な形を切りぬいた色々の色どりの紙です。貼りつけるの他に子供の最もよろこぶものです。色の種類は八色です。

定評ある保育玩具

玉落し

定價一五〇圓 送料三五圓

木球を轉がして的に當ると球がおちる。おちた球には六面の凹所が六色になつてをり今度何色が出るかを言ひあてるのです。幼兒の高級な精神機能の練習になります

砂型

四個入 定價一〇〇圓 送料三五圓

特に形を數理的見地から研究して完全を期しました。形は種々あります。

大獨樂

五個入 定價四〇圓 送料二〇圓

摘み芯棒をつけた木製の獨樂です。全部削り出しにしてゐますから至つて丈夫であります。材料は特別硬質の木を使ひました。

小獨樂

六個入 定價三五圓 送料二〇圓

新案積木

定價一八〇〇圓 送料三五〇圓

大型の積木で組立式になつてをり、汽車、自動車等何でも意のまゝにつくれます。

發行所 東京都千代田區神田神保町二丁目四番地 株式會社 フレーベル館 振替口座東京一九六四〇番

觀察繪本

キンダーブック

KINDER-BOOK

キンダーブックのフレーベル，フレーベルのキンダーブック——この繪本は餘りにも有名です。發刊以來既に通卷250號を發行し，全國の各幼稚園保育所をはじめ，健全な家庭から，學齡前の幼兒に無條件に與へられる代表的な繪本として積々の好評を戴いてをります。先頃連合軍總司令部ＣＩＥより發表ありましたものゝ中にも，アメリカにおいても類𦘕のない獨自のものであるとの御言葉がありました。企畫，編集，用紙，着色，製本凡ゆる面に不斷の精進をつづけ，號は號を追つて益々良いものを世に送りたいと努力してをります。次代の日本を背負う愛兒のためのこよなき心の糧であります。

Ｂ５判・16頁・月１回發行・定價 30 圓・送料３圓

今回新たに左記の通り發賣致しました。いづれも權威ある著者による良心的著作です。御申込み下さい

瀧田要吉著並裝幀

自然物のおもちや

Ｂ６二百餘頁・本文用紙六〇听上質紙・美裝

定價二〇〇圓・送料一二圓

四季の自然物を材料にしてその特徴を生かした玩具の創造の喜びと工作過程を懇切に説明し、又各地の童謡を隨所に入れ情操教育に資した、それ自體としても藝術的香氣の高い本です。

東京都保育會文化部編

劇あそび脚本

Ｂ６百七拾餘頁・上製・定價一二〇圓送料一二圓

手輕に作つた舞臺に幼兒の嬉々とした動作が、リズムに乘つて動き、可愛いいでたちと、やさしい臺詞はきつと幼兒の大滿足の遊びの一つでしよう、この本は幼稚園保育所で實演させ好評を博した中から選ばれた幼兒劇の部門に迄闗連をもつ是非、保育室にそなえつけたい本です。

佐藤義美作・耳野卯三郎畫

紙芝居 第三集 お母さんはどこへ

Ｂ４版・全五色刷・用紙二〇〇听

定價二五〇圓・送料三五圓

優しい優しいお母さん、僕の、私のお母さん。一番好きなお母さん、そのお母さんの話です。

（新刊）東京都保育研究會遊戯部會編

楽しい遊び（曲譜と遊戯圖解）

Ｂ５判八〇頁

定價一六〇圓

（近刊）内山憲尚著

お話と人形芝居

Ａ５判二〇〇頁

定價二〇〇圓

幼稚園保育所

發行所　東京都千代田區神田神保町二丁目四番地　株式會社　フレーベル館　振替口座東京一九六四〇番